

学習の動機付けと質の高いインプットのために 外国語アウトプットの効果とは？

文◎河野太一 Taichi KONO イラスト◎森 有綺 Hiroki MORI

最近では英語を話す、書くなどのアウトプットが上手な日本人も徐々に増えてきましたが、日本人の全体像としては、英語をコミュニケーションの道具として使いこなそうという意識はまだまだ低いです。どうしてもTOEICなどの「テスト勉強」が主になってしまい、英語を自ら発信するということは、はるか彼方にある最終目的のように感じている人が多いのではないのでしょうか。

しかしアウトプットは、それ自体が学習の一環です。目的でもありませんが、手段でもある。学習サイクルの中の、大切に不可欠なプロセスです。アウトプットという行為そのものに学習効果を高めるさまざまな効用があります。

アウトプットで 学習の動機付けを

アウトプットの効用の一つは「動機付け」です。外国語ですから、自分から話そう、書くこととしても、表現を思い付かなかつたり、通じなかつたり、間違えたりします。そして「悔しい」とか「恥ずかしい」と感じる。でもそうした感情があるからこそ、「勉強しなければ」という気持ちもわくと思うんです。自分から英語を使ってみ

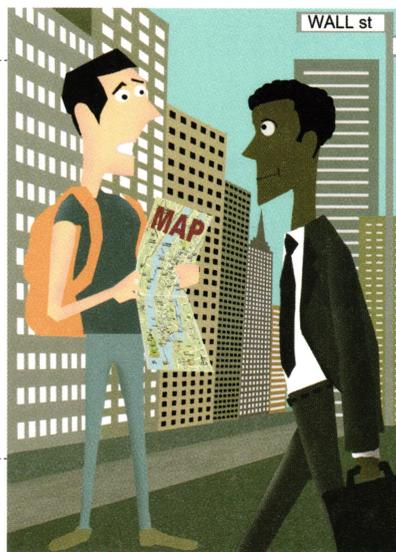
て、それがうまくいかない、という体験をしないと、何のために勉強しているのかという目的意識が薄れてしまいます。英語学習が継続できないとか停滞しているという人には、アウトプットをしてみても失敗するのが、実は一番の刺激になるんです。

「悔しい」「恥ずかしい」という感情面もさることながら、アウトプットの失敗は「自分には足りないものがある」という冷静な認識も与えてくれます。人間は「不足感」とか「欠落感」を感じると、それを埋めたくなる心理が働きます。海外旅行をすると、「ああ、この国の言葉がもつと話せたら」と思いますよね。で、「帰ったら本気で勉強しよう」と意欲に燃えて帰国するのですが、しばらくするとその気持ちはしぼんでしまう。日常が忙しいとかいろいろの要素があるでしょうが、その言語を使う機会を失って、「もつと勉強しなきゃ」と思えなくなることも作用しているのではないのでしょうか。学習には、アウトプット↓足りないものを感じる↓インプット、というサイクルが欠かせ

ません。

インプット学習にも アウトプットを活用

「足りない」という意識は、表現に対する敏感さにもつながります。母語なら簡単に言えることが、外国語ではなかなか言えないですよね。読んで理解するのは問題なくできて、自分の口からはスムー



ズに出てこない。そういう体験をすると、使いたかった表現に出合った時に「ああ、こう言えばよかったのか！」と強烈な印象を伴って記憶に残ります。

私はTOEICのリスニングなどのインプット学習の際にも、常にアウトプットを意識し、英語を声に出して練習するよう指導しています。読めば簡単に理解でき

Profile

河野太一

英語塾「河野塾」代表。早稲田大学政治経済学部中退。Seattle Central Community College卒業。半年間留学した以外は日本で英語を身に付けた「国内派」。「日本人は日本国内で英語を勉強して、どこまで英語力を伸ばせるか」をテーマに英語学習法の研究を重ねる。TOEIC、大学受験指導を経て、留学準備校にてTOEFL、GMAT、IELTSの講師として活躍。主な資格は、TOEFL iBT 116点（120点満点）、TOEIC 990点（満点）、TOEIC Speaking and Writing Tests 各200点（満点）、英検1級など。著書に『必ず覚えらるるTOEFLテスト英単語3400』『必ず聞き取れるTOEFLテストリスニング』『必ず聞き取れる新TOEICテストリスニング』（すべてアルク）がある。

る表現でも、「自分からアウトプットできるだろうか」というフィリターを通すことで、きちんと声に出して学んでおくべき表現が見えてくる。TOEICの問題集なども、見方を一つ変えれば、「使える」表現の宝庫に見えてきます。アウトプットを意識すると、インプットの質が上がります。ただしインプットをしたからといって、覚えた表現がすぐに口から出てきたり、書けたりするわけではありません。インプットしたものは、何度かアウトプットしてみ、失敗を重ねて、ようやく使えるようになるんです。だから外国語の上達には、アウトプットして失敗できる場を意識的に確保することがどうしても必要なんですね。



どうやって アウトプットをするか

そのようなアウトプットの場合としては、今はFacebookやTwitterなどいろいろな選択肢があります。FacebookやTwitterは「書く」ツールですが、「書く」ことは「話す」ことよりも考える余裕を持てるので、表現を考えて、使って、定着させる場としては最適です。今回の特集にあるように、「話す」機会も今では手軽で安価に得ることができるので、自分の興味のあるところからどんどん始めるといいでしょう。その際に覚えておきたいのは、「会話」は「テスト」ではない、ということ。文法や発音の間違いを、相手はそれほど気にしていません。相手はコミ

ュニケーションを求めているのであって、試験官ではないのです。先ほど触れた通り、間違えれば「恥ずかしい」と思うのは自然なことですし、無理にそうした感情を抑える必要もありませんが、自分の間違いを常に監視する感覚になってしまふとアウトプットはツラくなります。そんな時は、「間違えたという事実は、自分さえ忘れてしまえば、相手も覚えていない」と考えると、スツと気が楽になると思いますよ。

一方で、自分のアウトプット能力を客観的に測ってみたいという方は、TOEICの「Speaking」Writingテストを受験してみるのもよいでしょう。バラエティー豊かな良問で、かつ比較的初心者にも取り組みやすいのでお勧めです。留学志望者向けのTOEFLテストにもアウトプットのセクションがあります。こちらはかなり手応えがありますが、上級者はこれを目標にするのもよいでしょう。ほかにも数多くのテストがあります。これらを受験することで新たな刺激を受け、新鮮な気持ちで学習に取り組んでほしいですね。